

て合理的自愛との四條件を實行し行きて、遂ひに全世界の人類が皆悉く此の四條件を實行するに至るならば其時は吾人人類が最大幸福を共樂すべき理想實現の時であると云ひ居ることの事なるが、此れを本宗より見る時、前四條件實行とは即ち妙法蓮華經の五字を以つて全世界を統一したるの時なるべしと確信するのである願はくば平和に生きんとするの人々各自が應分の力を盡し以つて妙法蓮華經の五字に統一し、此の理想實現の一日も早からん事を切に希望して止まぬのである。



慈 悲 に 就 て

吉 川 啓 善

慈悲に就いてと云ふ表題は、實に大きい廣い意味を成してゐます。けれど、私は此處に於ては唯だ愚感の一端を述ぶるのみであります。凡そ吾等人間は勿論畜類に至るまで、何れも、何等かな慈悲を蒙らないものはありますまい。その慈悲には、或は佛の慈悲、或は祖先の慈悲、或は師の慈悲親の慈悲等種々あります。亦此れは佛敎の方面より申しまして、普通一般から云ふても、誠に離れない自然の情であります。

處で佛様の慈悲は如何様であります。既に吾等が知つて居る通り、大聖釋迦牟尼世尊は限りなき、一切衆を憐み給ふて、『三界の衆生は悉く是れ我が子なり』と。仰せ給ひ、佛様は大慈大悲の御意より吾等の親となつて、而も『唯だ我一人のみ能く汝等を救ひ護る』と。申されて、末世末代の衆生を御法の岸に救ひ下されたではありませんか。亦親の慈悲の厚き事は現に吾等が痛切に覺する處であります。斯様に森羅萬衆皆自然の慈恩に浴せないものはありません。偕て此等の慈悲を心から謝し、此れに對して何物かを自覺する者が幾許ありません。嗚ぞ少い事です。私が丁度京都に在つた時、恩師に導びかれ度び々々宗祖大聖人の苦

學の地且つ聖人の一代に於いての一大感悟の御靈地なる、比叡山横川の東塔定光院に參籠して居りました時種々古來の比叡山の僧徒に關する風説を承玉りました、その中にも正算法師の母の慈愛物語は今只私の頭に、さながら繪の様に残されて居ります、今參考までに述べませふ。正算僧都は比叡山の兩塔院に居られた、若い僧侶でありました。此の人は至つて貧乏な人であつて、寒さ飢えさを忍んで學問をして居りましたが、京都に一人の母親がありました、これとても同じく其日々々の煙も立ち兼ねる様な有様でありました。頃しも冬の末方四方の山に白々と雪の降り積るを見るにつけても、子を思ふは親の習ひで、我が身の貧乏よりも只、小供の事が片時も忘れられぬ位なものであるが、さて正算僧都は此の寒さに、飢さも忍んで學問をしてゐるであらうか、世に在る親ならば、せめては折節毎の付け届でもして、人中で肩身をしばめさせまいに何を云ふても此の貧乏な母親が、そうする手段もなし、近頃は久しく便りもないが、病み煩ひでもせぬかと思へば、心元ならぬに依つて寒さの時分なれば、身體を大切に學問せられよと、細々と文認めて、夫れに白米一升を添へて使の者を頼んで正算僧都の許へ贈られました。案の如く京都に夫程に雪が積る位だから叡山は目の及ぶ限り、一面に白妙。漸く暮方に叡山に着きましたが、窓に燈火の光るかすかに見ゆるを便りに彼の使の男は、『私は京都より正算僧都の母御の使に參りました』と。云ふ、聲を聞くなり正算僧都は出て來て其の男に會われると、使は手紙と白米壹袋とを差出しましたれば、正算僧都はこれは珍らしや。京都の母上より來た文であるかと、再三巻き返へし、『ア、勿體なき母上の御慈悲は有難い者である。何はともあれ、其の米を出して炊いてあげよう、ササ寒かつたであらう』と。御飯をたいて其の使の男に食べさせ、自分も箸をとりて心よく食べられたが、どうしたものか、彼の男は御膳に向つて御飯を食べずに、只ホロリホロリと涙を零して居る。正算僧都はハテけしからん、此の御飯はなせ食べられないかと問はれたら、男が答へて云ふには、『さればでござぬます、貴僧は此の白米を唯尋常の米と思召して在らせられる様ですが、此れは、貴僧の母御が此の間より色々思案なされた、けれども如何んとも仕様がな、夫れ故、自分の髪を、はさみ切つて賣代なし、その金にて買ひもごめられたる、此白米。女の身は髪飾りごと一筋を千筋なれとかきなで

金錢よりも、大切に思ふ黒髪を、可愛我子の爲めなれば斯様になされたのであります。私は母親と云へば同様、嗚ぞ、此の様に思ふてくれるであらうに、夫を夫れとも思わずに、母に向つて、知らかに言云ふた事もなく、一日片時の孝行さえ盡した事も無い、夫れを思へば悔しくて、今此の御膳に向ふにつけ、白米は親の肉、此の飯一粒々が母御の髪筋一筋々に當ると、思ひますれば、我等が様な賤しい者でございませぬが、餘り哀れに思うて涙に胸もふさがり、中々食事も喉へは通りませぬ」と。物語り致しますると、正算僧都是一部始終を聞かれ、「さてさて左様でありましたが、親は思へど、子は思はずと、そう云ふ事とは夢にも知らず居たのは、淺間しき事でありました」と。暫時の間ひれ伏して感涙に咽ばれたと云ふ事でございます。

此の様に親が子に對する慈愛と云ふものは、實に熱裂なるものであります、けれども、子は此の厚き慈悲を受けつつある事を思はない。茲において日蓮大上人も斯くの如くであります。吾吾末法一切衆生の爲めに去る六百七十有餘年のその昔悲雨慘風の六十年の御生涯を、師子奮闘せられたではありませんか。噫！。吾等聖人の門下よ、何んぞ、永き夢中より目覺めて佛の慈悲に報せず居られませぬ。

遠藤 篁 溪

題聖誕七百年記念塔 塔老父之建立而
從來有鏡石之稱

聖誕今茲七百年 幸逢嘉會喜奇緣 延山鏡石人知否 讚詠支願永劫傳

思 鄉

僻性宜應住僻村 枉交塵累豈堪煩 常懷高祖棲神地 况我師親老尙存

慈 上 謝 恩

驅鳥往歲侍貞松 今日阿蒙上鷲峰 法乳恩深猶未報 願顏只喜接慈容